TTC 山行実施記録表　　平成22年5 月23 日 報告者:門間信一・小嶋孝夫

山行名	愛鷹山連峰縦走（越前岳・呼子岳・位牌岳・袴腰岳・愛鷹山）[1504､2 ･1313 ･1457，5 ･1248 ･1187，5M　静岡県]
実施日	平成22年 5 月 15･16 日 （土･日） 1泊2日 テント泊
天候／参加人員	天候曇り　レベル:★★★☆　参加人員: 5 名
ﾊﾟｰﾃｨｽﾀｯﾌ	CL/計画:､SL:､ 会計:､救護:､ 記録:　氏 名 削 除
参加メンバー	氏 名 削 除 （男4名／女1名）
費用 @4，200円 カンパ金207円	電車代2､400円(松田駅→御殿場駅480円×5名)､バス代4､300円(御殿場駅→十里木(860円×5名) タクシー代2，000円(600ハンドレットクラブ→愛鷹東名バス停1，680円＋チップ320円) 食料一式5，193円､ガスボンベ900円(450円×2個) 東名高速バス代6，000円(1，200×5) 集金4，200円×5名＝21，000円　出金計20，793円 カンパ金207円

歩行／行動時間	1日 ／ 2日	歩行時間	休憩時間	行動時間	歩行時間	休憩時間	行動時間
	ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸ	6:00			3:40		
	計画	6:00	1:30	7:30	3:40	0:30	4:10
	実行	5:25	0:51	6:15	3:30	0:31	4:00

実行コースタイム記録

10　25　(10)　57
本厚木駅――新松田・松田駅――御殿場駅――十里木バス亭――登山口――展望台――1098，9地点――
6:36　7:04　7:23　7:55　8:25　9:11　9:20　9:28　9:40　9:50　10:15　10:25
(3)　5　(25)　38　43　(13)　2:26　30　17　(13)　25
勢子辻分岐――越前岳――呼子岳――蓬菜山――位牌岳――　一服峠――袴腰岳――
11:22　11:25　11:30　11:55　12:33　13:16　13:29　15:55　6:00　6:30　6:47　7:00
35　(12)　12　(6)　1:30 (20)タクシー待ち
馬場平――愛鷹山――分岐――下山口(広場)――東名愛鷹BT――東名厚木BT
7:25　8:00　8:12　8:24　8:30　10:00　10:20　10:30　10:53　11:48

コースの概要、特記事項、反省事項等

◆１日目（５／１５）　十里木の空は今にも泣き出しそうであった。バス停の広場で準備体操をして進行方向に約１０分歩くと立派なトイレがある。ここが登山口で木道がついた少しぬかるんだ坂道を歩き出す。やがて展望台に着くが、好天なら十里高原から富士山がまのあたりに見えたであろうが足さえ見えない。ちなみに諸説あるが愛鷹山の名前のいわれの一つとして「足高山」があるそうだ。すなわち（富士山の足元にそびえた高い山）とのことで富士山と同時代に噴火したこの山は、当時は２０００～２３００ｍの端麗な円錐形の姿を富士山と並びそびえていたようだが、この成層火山に放射谷が発達して侵食が始まり雪崩、降雨により加速度的に山体は崩壊して現在の鋸歯状の峻険な姿へとなってしまった。(「愛鷹山」吉原市教育委員会刊参照）その後時代の変遷の中で「愛鷹山」と書くが「あしたかやま」と読ませるところがいかにも面白い。

ここからヤブと雑木に覆われた急登な道を行くと程なく広い平坦地に飛び出す。１０９８，９ｍ地点の見晴台である。ベンチで一息入れ滑りやすい道を行くと分岐がありたちまち連山の最高峰の越前岳に着く。たいして広くもない山頂は登山者でごった返し座るところもないが幸い確保でき昼食とする。山頂からはこれから行く位牌岳や切り立った鋸岳が見られたものを・・・と思いつつ歩き出すとあんなにいた登山者の姿がまるで見当たらない。意外と尾根道は狭いが思ったより歩きやすく、意外さに驚く。やがて尾根から出っ張ったような狭いピークに着く。急なカーブのところにあるため通り過ぎてしまいそうだ。ここが呼子岳である。まったくこの連山は変わった名前が多い。急な坂道を下ると大きな岩に挟まれた切り立った割石峠に着く。左に下りる道は大沢橋から山神社経由「愛鷹山登山口」のバス停へ続き、右に切り落ちた道は、今は廃道になっているが須津山荘に続き大岳や袴腰岳を結ぶルートである。一気に登ると蓬莱岳へ飛び出す。不謹慎？にも「危険につき通行禁止」の看板の前で笑いながら写真をとる。ハーネス等を着けいよいよ今回の最難関の岩場へと向かう。いきなり鋸歯状のうねったような鋸岳を見下ろした急なザレた下り坂を浮石を踏まないように歩き出し、行く手をさえぎるように立ちはだかる岩をクサリにつかまりながら乗り越える。道はブリッジを巻くようにつけられているが足元の岩が侵食により崩れ落ち、クサリに頼らなければならないところが連続する。さらにこのクサリは細く錆びていて信頼感がまるでもてない。登りは急登でクサリ、木の根を使い攀じ登る。やがて大きな